

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00995

研究課題名(和文) 中世宗教が「個人」に及ぼす影響に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research on the Influence of Medieval Religion on the Individual

研究代表者

衣川 仁 (KINUGAWA, Satoshi)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・教授

研究者番号：10363128

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ある「個人」が抱く(1)願望の内容、(2)成就の手段、(3)祈りの効果、(4)祈りに対する「個人」の受けとめ、(5)その結果による「個人」的信仰の変化、を軸に検討を進め、「個人」的な願望成就の手段としての祈りに武家・寺家という権力体が、一方で抑圧をみせていた歴史的環境について明らかにし、武家社会を構成する武士「個人」に拡張するという課題も浮き彫りとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本中世では公武の政権が願望成就の手段として祈りを選択してきた。その一方で、宗教性を内包する権力支配を下支えする「個人」について考察したことが本研究の意義である。人間社会と宗教との関係は現代においても重要で、日本ではそれが見えにくいのが、歴史的考察によって浮き彫りとなった宗教性の特質が、現代社会と宗教との関わりをいかに考えるかの補助線になり得るという点が、もう一つの本研究の意義である。

研究成果の概要(英文)：This study examined the following issues: (1) the content of the desire of an "individual," (2) the means of fulfillment, (3) the effect of prayer, (4) the perception of the "individual" in prayer, and (5) changes in "individual" faith as a result of the prayer. The study also highlights the issue of extending the concept to the "individuals" of the samurai who constituted the samurai society.

研究分野：日本中世史

キーワード：祈り 中世宗教 霊験 武家社会 軍記物

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの中世における宗教史研究は、国家・社会における宗教について考察してきた長い歴史がある。その結果、中世の宗教が持つ大きな“力”が解明されてきた。ここでいう宗教の“力”とは、具体的には政治的・経済的な力であり、また軍事的な力で、前近代的なものとして扱われるものであった。そして、その背後にあるのが神仏であり、それこそが宗教の“力”の前近代的たる所以である...という説明が多くなされてきたことも否定できない。たとえば人々が願望成就のために何らかのアクションをおこすことは、無宗教と評されることもある現代日本においても深く根付いている。たとえば「お守り・おふだ」が現代人にとってもポピュラーであり続けている事実などがそれである。(写真右は石清水八幡宮・東大寺・峰定寺などで頒布されているお守り)



宗教性の核心であるはずの神仏こそを、宗教がもつ“宗教的な力”として改めて光を当てる必要があるのではないかと、その際、国家・社会という重要な要素にではなく、「個人」に焦点を合わせる必要があるのではないかとという着想により、本研究を進めることとした。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の中世社会における宗教と「個人」の関係、主として中世の宗教が「個人」に対してどのような影響を及ぼしていたかについて調査・検討する。上記背景でも示したような、従来の日本中世宗教史研究においては、国家・社会と宗教を重視するあまり、宗教が持つ大きな“力”を明示できた反面、特に民衆に関しては、その大きな“力”の前に為す術もなく呪縛されたという歴史像を構築できた反面で、日常生活の基盤として機能したというような側面が過小評価されてきた嫌いもある。この点を再評価すべく、また中世の宗教像と民衆像を再構築することが本研究の目的である。そのために、平安時代の説話・文学、古文書、日記などの記録類を中心とした史料群を博搜し、当該期の「個人」が抱いた願望に対し、どんな手段(=祈り)を選んだか、その祈りはどのような結果をもたらしたか、その祈りの効果について、「個人」はどう考えたかというデータを集積することで、国家と癒着してきた巨大権力としての宗教ではなく、「個人」にとっての宗教の実像に迫るものとして研究の目的を設定した。

## 3. 研究の方法

本研究では、日本中世における「個人」と宗教の関わりについて考察することを目的に設定したが、その前提にあるのが国家・社会との関係の内にある宗教性であることも否定できない。それゆえ幅広い史料をみておく必要があると考え、まずは四つの要素に分類した上で、データ集積を進めていくこととした。具体的には、ある「個人」について、(1)願望の種類、(2)願望成就の手段、(3)祈りの効果・結果として発生した現象(願望の成否含む)、(4)「個人」の祈りに対する評価、あるいは「個人」に対する祈りの影響(信仰面含む)についてである。たとえば「個人」が願望成就の手段として祈りを選択しないケースもあり得るため、中世の「個人」が国家レベルとは異なってどのような願望を抱いたかという心性の問題として幅広く願望をとらえ、祈り以外の手段についても抑える必要があると考える。そこでこうした祈りや願望に関わる資史料データを集積することを第一とし、具体的には平安中後期の古記録類、古文書類、説話・文学類とする。

## 4. 研究成果

「1. 研究開始当初の背景」で現代の「お守り・おふだ」が未だ世に浸透していることを指摘したが、一方でそういった祈りのカタチ(あるいはツール)は、時代に応じて変化しているという側面もある。たとえば現代的なツールの象徴として、右写真のようなマイクロSD化されたお守りを挙げるができるだろう(京都・法輪寺の「虚空蔵菩薩御守護」)。現代の「個人」が身につけやすいような、現代的な工夫と評価してよいものであるが、お守りとしての機能に変化はない。



一方、祈りの効能そのものが歴史的な過程で変化した事例も確認できる。京都・仲源寺の本尊である丈六の地蔵菩薩像は、「目疾（めやみ）地蔵」の名で親しまれているが、もともとは「雨止（あめやみ）地蔵」だったとされる（写真は仲源寺の扁額「雨奇晴好」）。大雨による河川の氾濫から地域を守る「目疾地蔵」が、「個人」的願望である眼病への効果を謳うようになった背景は不明とせざるを得ないが、そこには地域あるいは社会的な願望から「個人」的願望への対応を重視・尊重するようになった宗教側の変化を読み取ることも可能だろう。また「個人」の現世利己的な願望を叶えることが帰依の集積に繋がるという功利的確信の存在に繋がるとすれば、国家・社会にむけて発揮されると理解してきた宗教の“力”には、「個人」にとっては別の意味合いがあったということになる。



こうした着想のもと、令和元年度には平安期の祈りとその効果、「3. 研究の方法」で掲げた(1)(2)(3)について検討し、『神仏と中世人 宗教をめぐるホンネとタテマエ』（吉川弘文館）として上梓した。そこでは豊作を願う雨乞いの祈りが富に関連し、無病息災の祈りが生命に関わるものである事例などから、中世人の願望の中心が「富と寿（いのち）」にあることを指摘した（(1)）。またそれらを成就させるために、中世人たちは宗教界に対し様々な祈りを要請したこと（(2)）。こうした要請に対し、宗教界は期待に応えるべく様々な祈りを提供できるよう準備し、成功した場合には霊的な力の喧伝がなされ、その力は社会に記憶・記録されたこと（(3)）などを明らかにすることができた。

その後、令和2年度から3年度にかけては、寺院という宗教施設が標榜した「ご利益」がいかに社会的に受容され、また場合によっては変化していったのかという観点で再検討する手掛かりとして、主として天台宗に属する都周辺の寺院に関する歴史を検討した。これは天台宗寺院の辞典編纂の過程と軌を一にするものであったが、さまざまな伝説として現代にも残される寺院あるいは宗教者たちがもたらす「ご利益」のバリエーションや、それによって帰依を集めていった諸寺院歴史過程についてまとめることができた。たとえば瞻西について平安貴族の日記に記録された「往生の業、自然相催し、終日念仏」「説法の間、落涙抑え難きものなり」（『中右記』）「弁説の妙、言泉沸くが如し」（『永昌記』）というような史料からは、人々から絶賛される宗教的な練達ぶりを確認することができるが、そのことと彼を迎えた寺院の繁昌ぶりがどう対応したのかという視点、すなわち「講説に接し、天下の道俗男女上下衆人みな以て帰依す」と評されたような人を動かす“力”としての側面を再評価した。

なお、(4)（「個人」の祈りに対する評価、あるいは「個人」に対する祈りの影響）に関しても、たとえば祈りの成功例が場所・人・祈りの手法などのよき先例として定着することになったため、さらなる願望を求めて宗教界にすがらようになる構造があったことなどを、平安期の記録史料から明らかにした。たとえば前近代社会では不吉とされていた彗星を消す祈りに関して、1145年のハレー彗星を消せなかったにもかかわらず天台・真言両宗の僧侶たちが褒美を授かったことについて、当時の人々が「星出の賞」と皮肉ったという事例（『台記』天養二年五月三日条）などからは、祈りに対する評価の背後に政治的な価値観や宗教界での評判など、世俗的な要素があることなどを明らかにした。またそれ故に祈りが失敗してもそれを個別に非難することは避けられる傾向があった点も指摘できた。ここに、祈りの背後にいる神仏への不信を表明できない圧の存在と、現実に願望を成就できていないことへの人間的な不満との間にあるギャップを想定することが必要であることも指摘できたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 衣川仁	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 224
3. 書名 神仏と中世人 宗教をめぐるホンネとタテマエ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------